

職業会計人に必要な管理会計の知識



経営戦略研究科教授(会計専門職専攻) 浜田 和 樹

1. 職業会計人に求められているもの

近年、競争の激化や企業活動やグローバル化により、国際的に通用する高度の知識をもった職業会計人（会計的判断を必要とする専門経営管理者、公認会計士等）に対する需要が高まっている。国際的競争力を高めるためには会計指標による適切な管理がなされる必要があり、資本市場が健全に機能するためには適正な財務情報が提供されなければならないからである。ただ、企業活動の複雑化、高度化により、会計に精通するのみならず、経営、ファイナンス、経済、法務、統計等の関連分野に関する深い学識を持った人材が必要になっている。公認会計士法の改正も2003年に行われ、公認会計士を狭い意味での「監査の専門家」でなく、幅広い知識、高い倫理観、ガバナンスについての理解、応用力、思考力をもった「会計の専門家」として位置付けている。

2. 会計的判断を必要とする専門経営管理者に有用な管理会計の知識

管理会計は計画と統制を対象とし、内部利害関係者（経営者、管理者等）に計画と統制に有用な情報を提供したり、必要であれば有用な情報を得るための技法の開発やモデルの開発を会計的立場から行うことを目的としている。そこでの管理会計が対象とする情報とは、必ずしも財務情報だけでなく、財務情報と関連づけられた非財務情報をも含んでいる。会計がそれ以外の測定方法より有用であるとされるのは、企業の経済活動のプロセスを把握する理論があり、理論に裏付けられた計算技法の体系があるからである。このような経営管理を直接対象とする管理会計を習得することは、会計的判断を必要とする専門経営管理者にとって、企業経営に不可欠な手段を獲得したことになるであろう。

近年、管理会計が対象とする最近の主な研究方向は、経営上の課題を反映して多岐にわたり、①計画と統制のための正確な財務情報の提供とそれによる管理（ABC：Activity-Based Costing）、ABM：Activity-Based Management）、②財務情報だけでなく、非財務情報をも利用した戦略管理（バランスト・スコアカードによる管理）、③グループ経営に役立つ管理会計、④利益よりも企業価値を重視した経営（EVA：Economic Value Added）、⑤見えざる資産の管理、⑥CSR（Corporate Social Responsibility）を意識した経営、資本市場を意識した経営、等が挙げられる。この⑥の方向は、もともと私的な性質をもつ管理会計に公共性を加えるような方向であり、「管理会計の財務会計化」の現象とも捉えることができる。

3. 財務会計の管理会計化

財務会計の分野でも、非財務諸表情報の開示に対するニーズが高まっており、この背景に

は、①情報要求の多様性、②リスク情報や将来指向情報の重要性、③財務諸表上の利益と株価との関連性の低下を示す実証結果、④企業経営の透明性確保の要求、⑤IR活動の重要性、等がある。また企業の側でもこれらの情報を開示する理由は、経営戦略上の理由、株価維持や資金調達コストの引き下げ、訴訟リスクの回避等が考えられる。

現在、多くの企業により開示されている非財務諸表情報（法規等で要求されているものも含む）には、①EVAのように財務諸表上の利益に修正を加えた利益や、売上高や経常利益等の将来の予測値、②経営者の過年度の財務状況や将来の見通しおよび分析、③投資家の判断に影響を及ぼすリスク情報、④無形資産等の情報、⑤内部統制システムに関する情報、⑥CSR活動についての情報、等がある。

上述の非財務諸表情報の中には、早くから管理会計の分野で研究されてきたものも多い。例えば、中長期利益計画の情報、予測利益、EVA、無形資産、環境経営情報等である。管理会計は法規等によって規制されないので、多様な目的で多様な情報が測定される傾向があるからである。上述の現象は、「財務会計の管理会計化」の現象とも捉えることができる。

4. 公認会計士に必要な管理会計の知識

財務諸表に示された数字の背景を知るためには、管理会計の知識が必要である。どのような経営計画を立て、経営活動をどのように実施した結果としてその数字になったのか知るためには、管理会計の知識が必要であるからである。監査も多様な非財務諸表情報の開示要求に適切に対処していかなければならない。従来のような財務諸表の監査の機能だけでは、監査または監査人は、社会から期待されている役割が果たせなくなっている。それ故、監査は企業内の様々な情報に関与せざるを得なくなっている。このように考えると管理会計は公認会計士の監査にも、直接的にも間接的にも関わってくることになる。

5. 「考える管理会計」の必要性

職業会計人は、与えられた資料をもとに指定された方法で問題を解決するのではなく、自分で調べ、解法を工夫し、答えを導き出す仕事を中心である。時には、問題そのものを発見することが重要である。理論の背景、その応用、限界等についての知識があって初めて現実の問題が解決できる。教科書に書かれていないことが生じた場合にも、自分で考え、的確な判断を行うことが必要である。採用される管理会計技法も最初から与えられているのではなく、自分で選択し、利用法を工夫していくことが必要になる。その意味で、管理会計の学習法として、理論研究、計算練習、事例研究をバランスよく行うことが必要であるように思う。